順天堂大学脳神経外科・
大隈病院非常勤医師
梅村 淳（うめむら あつし）さん

脳内の神経伝達物質「ドパミン」が減少し、手足が震える、歩くときに足がでにくい、筋肉が硬くなるなど、特徴的な症状が現れる「パーキンソン病」。ほかにも自律神経に関わる便秘や、寝言、嗅覚異常などの症状も多く見られ、多様な症状から専門診療科の脳神経内科・外科への受診が遅れることも多い。

一方、治療面は進歩を遂げ、内服薬で3～5年程度は安定して過ごせる。ただし、投薬が10年を超えると、動けない状態が長時間続いたり、無意識に体が動く「ジスキネジア」という薬の副作用が現れてくる。その際の新たな治療の選択肢が、手術で脳に電気刺激を送る機器を設置することで、症状の改善を図る「DBS（脳深部刺激療法）」だ。講座ではパーキンソン病の基礎知識と主な治療法について学び、早期発見・早期治療の重要性について理解を深めたい。

Doctor's Talk ドクターズトーク 2022

教えてドクター！ VOL.1

企画・制作/中日新聞広告局

第10回 中日健康フェア2022

病気を知ろう、元気を学ぼう。

進歩した治療で生活の質を長期に維持

9月17日(土)18日(日)、ウインクあいちにおいて「中日健康フェア2022」が開催されます。これに先立ち、注目度の高い講座について、講師の先生にお話を伺いました。今回は体のふるえや動作の緩慢、筋肉のこわばりなどの症状が特徴的な、「パーキンソン病」の診断・治療法についてです。

脳内の神経伝達物質「ドパミン」が減少し、脳の運動を司る回路が機能しなくなる「パーキンソン病」は、初期段階では約半数に、手足が震える、歩くときに足がでにくい、筋肉が硬くなる、バランスがとれず転びやすくなるなどの症状が現れます。ただし、これらは他の病気にも見られる症状であり、ほかに自律神経に関わる便秘や、寝言、嗅覚異常など多様な症状があることから、パーキンソン病と診断されるまで多くの診療科を受診する患者さんも珍しくありません。

治療面では目覚ましい進歩を遂げており、現在は内服薬で3～5年程度は安定して過ごすことができます。ただし、その後は薬のコントロールが効かなくなる時間が出てくるようになり、10年ほど経つと動けない「オフ」の状態が長時間続いたり、無意識に体が動く「ジスキネジア」という薬の副作用が現れてきます。

そこで治療の新たな選択肢となるのが「DBS(脳深部刺激療法)」です。手術で脳内に電極を置き、それとつながる機器を体内にも埋め込んで、自動的に脳に電気刺激を与えることで症状を改善します。脳の手術といっても局所麻酔でできる、脳外科分野では難易度の高いものではありません。これにより薬が減量でき副作用を軽減。薬とDBSの双方の調整で、安定した状態を確保できる可能性が高まります。

パーキンソン病は、早期に正しい診断のもとで適切な治療ができれば、長期にわたり自立した生活を維持することが可能です。そのためにはパーキンソン病の知識を持ち、もしやと思う症状が現れたら、専門診療科である脳神経内科・外科に相談してください。

順天堂大学 脳神経外科
大隈病院 脳神経外科非常勤医師
梅村 淳 先生

中日健康フェア

9/17(土)・18(日)ウインクあいち

梅村 淳先生の講座は

パーキンソン病の診断と治療
～薬物療法から脳深部刺激療法(DBS)まで～

9月18日(日)13:00～14:30

事前申込制

講座の詳細・応募方法はWEBでcheck!
https://kenko.chunichi.co.jp/chunichikenkofair/

中日新聞広告二部「中日健康フェア」係
052-221-0702
(月～金10:00～12:00、13:00～17:00※土日・祝日を除く)

「中日健康フェア」の情報は、中日新聞「中日健康・医療・運動ナビ」でご覧いただけます

中日健康・医療・運動ナビ　検索